

和歌山

気軽に万葉集を楽しむ講座「第2回万葉玉手箱」が

このほど、和歌山市西高松の和歌山大学地域連携・生涯学習センターで開かれ、24人が1400年を経て現代に伝わる万葉集に親しんだ。

紀伊万葉ネットワーク（村瀬憲夫会長）が主催し、今回が2度目。講座では馬場吉久副会長が「万葉植物のお話

し」をテーマに語った。染料や食べ物として使われた植物に焦点を絞り、身近な植物が詠み込まれた恋の歌や季節の歌などを紹介。このうち、もみち（紅葉）

では「紅葉」と書いたものは1首のみで、ほとんどは「黄葉」とされているとし、万葉人が愛でたのは黄色の葉が多いことを話した。

その他、からある植物をよく観察するばみ（クヌギ）など、実際の写真で特徴を示しながら丁寧に解釈を加え「身近な植物を詠み、具体性を持たせることで歌が生き生きとしてくるのが万葉集の特徴。



万葉植物の歌を紹介する馬場副会長

と、万葉集がよく分かってくる」と魅力を話した。

続いて同会の堀畑登幹事が「乙巳の変（いっしのへん）で闇に葬られた蘇我入鹿の野望」と題し、万葉時代の歴史を読み解いた。